第二言語意味把握における母語の影響

-韓国語母語話者の「～出す」の概念を中心に-

백이연*
thyako@hanmail.net

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 先行研究
Ⅲ. 「～出す」と「～내다」の意味
Ⅳ. 「～出す」の意味把握における韓国語の影響
Ⅴ. 終りに

Abstract

本研究は複合動詞「～出す」の習得において、韓国人学習者がL1の影響を受けるかを調べたものである。そのため、まず、「～出す」とその韓国語の対応語である「～내다」の意味を認知意味論のイメージ・スキーマの展開で説明し、意味の差やその要因を明らかにした。「～出す」と「～내다」は両語ともに具体的で物理的な「移動」が抽象化し、「顕在化」の意味に転じ、さらに時間のアスペクトへと拡張するが、アスペクトとして「～出す」は「開始」、「～내다」はその反対とも言える「完遂」を表す。本研究では、「外への移動」を眺める視点の違いによってその差が生じると分析した。それを踏まえ、L1の概念が韓国人学習者の「～出す」の概念に影響を与えるかを、実際の調査(文判断テスト)を元に述べた。すべての文は、韓国語の完遂用法を日本語に直訳したもので日本語母語話者は違和感を感じるものであった。その結果、対照群である中国人の学習者に比べ、韓国人の学習者は全体の受容度が有意に(1%水準)高く、L1の影響が窺えた。レベルが上がるにつれ、L1に頼る傾向が弱まり、上位群は下位群に比べ、日本語母語話者の判断に近づいていくが、中国人学習者の上位群とは差が見られた。また、ほとんどの文が日本語母語話者に受容されなかったが、学習者は文によって異なる受容度を示していた。「～出す」の意味が移動や創出に関わるものは受容される傾向があり、純粋な「完遂」の受容度は低かった。これは、前者に関しては言語中立、後者に関しては言語特殊として受け入れているからであると考えられる。

Key Words : 複合動詞「～出す」、母語の影響、意味の転移、イメージ・スキーマ、プロトタイプ

* 이화여자대학교 강사

교보문고 KYOBO Book Centre

I. はじめに

本研究は複合動詞「～出す」を対象に、語彙の意味把握において母語が及ぼす影響を調べるものである。複合動詞は、かつてから学習者に難しい項目として挙げられ、上級になっても複合動詞を使いこなすことは難しいと指摘されてきた[1)]。しかし、こうした複合動詞が日本語において占める割合は無視できる量ではない。森田[2)]によると、『例解国語辞書』に収録されている動詞4622語のうち、単純動詞が2083語で45.07%、複合動詞が1817語で39.29%を占めており、単純動詞とそれほど変わらない数値を示している。

このように様々な複合動詞のうち「～出す」は、以下の2点から本研究の対象となった。第一、「～出す」はもっとも高い頻度で使われる複合動詞成分の１つである。小説、辞書などに登場する複合動詞を量的に調査した『複合動詞資料集』[3)]に記載されている複合動詞構成要素2166語の中で、後項の「～出す」は延べ432語で「～得る」とともに１位である。このように高頻度ということは、学習者の立場から見て、習得が求められる複合動詞であると同時に、接した可能性が高いので、その現状を調べる必要があると考える。

第二、韓国語にも似ている語彙「～내다」が存在し、複合動詞としても使われる。しかし、両語には共通点とともに差もあるので、母語(以下L1)の意味をそのまま日本語に適用できるではない。学習者は、すでに形成されているL1の対応語の影響をある程度うけることが予想される。

こうしたことから、本研究ではまず、日本語の複合動詞「～出す」と韓国語の「～내다」を対照し、意味の差やその要因を明らかにする。その次、両語の意味の差が韓国語を母語とする学習者の複合動詞「～出す」の意味把握にどのように影響するかをみる。それを通して学習者が持っている困難点を探り、効果的な語彙の提示方法や教材作りのための基礎を提供することを目的とする。

---

1) 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房, pp.1-5.
陳曦(2007) 「学習者と母語話者における日本語複合動詞の使用状況の比較―コーパスによるアプローチ―」『日本語科学』22, pp.79-99.
2) 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院, p.281.
3) 野村雅昭・石井正彦(1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所.

교보문고 KYOBO Book Centre

Ⅱ．先行研究

2.1 日本語の「～出す」と韓国語の「～내다」の意味

「～出す」の意味に関しては多くの研究がされてきたが、ここでは代表的なものとして、姫野の研究[4)]を概観する。姫野は「～出す」を＜表１＞のように大きく３つに分けている。「第一義」は「外部への移動」の意味で「それが転じて、出現や物事の顕在化を表すこともある。統語的複合動詞としては『動作や作用の開始』という意味を持ち、その働きは大きい」[5)]といっている。

＜表１：姫野の「～出す」意味分析＞

A.移動 (語彙的)	a.自動詞	V1に「外部への移動」意味有り ；浮き出す、溢れ出す、
		V1に「外部への移動」意味無し ；這い出す、飛び出す
	b.他動詞	方法(追い出す)、状態(持ち出す)、目的(救い出す)、 分析不可能(乗り出す)
B.顕在化 (語彙的)	a.顕現	磨き出す、思い出す、書き出す
	b.創出	考え出す、作り出す、描き出す、染め出す
	c.発見	聞き出す、探し出す、洗い出す
C.開始(統語的)	アスペクト(開始)	今にも雨が降り出しそうだ。等

「移動」の「～出す」は、主体の移動を表す「自動詞」と対象の移動を表す「他動詞」に分けられるが、どちらも「具体的なもの」が外へと「移動」する様子を表している。２番目の意味は「顕在化」で、もともとあったものが、あることをきっかけにして外に露出され、結果的に出ること(顕現)、何らかの手段でもともとなかった状態から出現させること(創出)、求めていたものが存在を明らかにすること(発見)を表す。

姫野が「～出す」の３番目の意味として挙げているのは、「開始」である。姫野は、影山[6)]に従い、「移動」と「顕在化」を１つの語彙として定着した「語彙的複合

4) 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
5) 姫野昌子, 上掲書, p.88.

교보문고 KYOBO Book Centre

動詞」、「開始」を前項(以下V1)と後項(以下V2)が統語的関係であり、結合が自由な「統語的複合動詞」として分類している。「開始」の「～出す」は「～始める」の類義語であるが、感情の動き、音の爆発、自然現象などにより使われる傾向があり、意志的な表現にはそぐわないという。これは、開始の「～出す」には意図性と予測性がないとした寺村[7]の主張とも一致する。

一方、韓国語の「～내다」の意味は、外部への「移動」を表すところは「～出す」と類似しているが、アスペクトとして「～出す」の「開始」とは反対概念ともいえる「完遂」[8]、または「成就」[9]を表すとされる。李[10]の日韓比較研究によると、両語ともに基本的な意味はものの具体的な「移動」、二番目が「表出」であるが、韓国語の「～내다」には「～出す」と違って次のような「完了」の意味があるという。

(1) 과연 그 고통을 견뎌내고, 비밀을 지켜낼 힘이 있을까?[11]
(はたしてその苦痛を耐えぬき、秘密を守りとおす力が私にあるだろうか)

(1) のように、「～내다」には話し手の強い意志と完遂の意味が含まれる。反面、日本語の「～出す」は、ものの始まり、即ち「開始」の意味を持つということは前述したとおりである。また、李は、日本語の「～出す」は具体的な移動の意味に、韓国語の「～내다」は心情変化の抽象的移動により多く使われる傾向があると主張する。両語の差をまとめると<表２>のようになる。

<表2：李の日韓対照>

	共通の意味	差異	傾向
～出す	外部への移動 表出	開始	具体的な移動
～내다		完遂	心情変化の抽象的移動

6) 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版.
7) 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版, pp.175-176.
8) 김기혁(1983)「보조동사의 생산성」『연세어문학』, pp.136-160.
9) 손세모돌(1994)「보조용어의 의미에 관한 연구」『한글』223 한글학회, pp.107-129.
10) 李暻洙(1996)「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究ー本動詞との関連を中心にー」『日本語教育』89, pp.76-87.
11) 李 暻洙, 上掲書, p.82.

교보문고 KYOBO Book Centre

このように李は日韓の両語において似ている意味を持つ語彙「～出す」と「～내다」を比較し、その共通点と差を明らかにしている。しかし、その意味のずれの原因については曖昧な叙述にとどまっており、そのような違う方向への意味拡張が起きた理由に関しては明らかにされていない。また、両語の差による韓国人学習者の習得困難点を述べているが、実証的な研究は行っていない。こうしたことから、本研究では、まず「～出す」と「～내다」の意味の差やその原因を明らかにした上で、韓国人学習者が実際L1の影響を受けるかを調べることにする。

2.2 第二言語習得における母語の影響

Tanaka&Abe[12)]は、学習者の第二言語（以下L2）の意味領域（meaning potential）が母語話者と異なることを明らかにし、その要因は学習者がすでに持っているL1の影響によると述べている。学習者のL2語彙の概念は、すでに形成されているL1概念に深く関わる。Odlin[13)]は、意味転移のうち、時間・空間概念におけるL1の転移を取り上げ、L1で世界を把握する見方や概念がL2に反映されるといい、L1が人間の世界を見る観点を決めるといったWhorf理論の復権を試みる。こうした研究を通して、一時疑問視されていたL1の影響は、特に意味と概念の転移に関して新しい地平を広げつつある。

しかし、学習者がL1のすべての意味をそのままL2へ転移させるわけではない。かつてKellerman[14)]は、学習者がL1に関して持っている意識が転移の程度を左右すると主張し、学習者の母語であるオランダ語「BREKEN」（英語のbreak）の転移可能性を調査した。その結果、一般的で多く使われる、基本の意味に近い「He broke his leg」「she broke his heart」など「無標（unmarked）」項目はL2にそのま

12) Tanaka, S. and Abe, H(1985)Conditions on interlingual semantic transfer, *Tesol 84:A brave new world for TESOL,* pp.101-120.

13) Odlin, T(2006)Could a contrastive analysis ever be complete? In Avabski,I.(ed.)*Cross Linguistic Influence in the Second Language,* pp.22-35.
Odlin, T(2008) Conceptual transfer and meaning extensions. In Robinson,P. and Ellis,N.C.(eds.) *Hand book of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition,* pp.306-340.

14) Kellerman, E(1979) *Transfer and non transfer: where we are now. Studies in second language acquisition2,* pp.37-59.

교보문고 KYOBO Book Centre

ま翻訳しようとする傾向が強く、イディオム表現と「A game would break the afternoon a bit」「Some workers have broken the strike」など「有標 (marked)」項目は翻訳の可能性が低かった。これは学習者が無標な項目は言語中立(language-neutral)、有標な項目は言語特殊(language-specific)と判断したからである。

Kellermanの研究はL2の意味習得においてL1の転移可能性を機械的な習慣ではない、心理的、認知的視点から究明し、後の語彙習得と転移研究に多大な影響を及ぼした。それまでL1の「干渉」が多くの研究者によって疑問視された理由の１つは、L2に対する「L1の機械的な適用」を前提とする「干渉」の考え方は、実際の学習過程から観察される人間の心の創造的な仕組みを否定していたからである。しかし、Kellermanは、転移において学習者が自分なりの論理的な枠組みを持っており、転移が単なる反射作用ではなく、創造的な過程でありうることを示したのである。

Kellermanが母語の正文を対象にして翻訳可能性を調査したのに対して、Shirai[15]は日本人学習者のL2である英語文を対象に、その文に使われている「PUT」の適切性・不適切性をどのように判断するかを調べている。彼は特に、学習者が「PUT」を受け入れる範囲が母語話者とどのように違うか、その差を明らかにした。全体的な傾向として、学習者の「PUT」概念はL1の対応語「置く」と深く関わり、「PUT」の意味領域も「置く」の影響が窺われた。文の受容度を見ると、学習者はL1、L2共にプロトタイプ[16]については受容度が高く、L1でも、L2でも非プロトタイプ項目について低い受容度を示した。しかし、先行研究とは違って、母語依存的な下位レベルの学習者はL2の非プロトタイプ項目についても過剰拡張する傾向が見られた。また、L1の「置く」にはない項目を見ると、L2のプロトタイプに近い項目は習得が早いが、L2の非プロトタイプ的な項目は習得しにくかった。

---

15) Shirai Y(1995) *the acquisition of the basic verb Put by Japanese EFL learners*: prototype and transfer『語学教育研究12』大東文化大学, pp.61-92.

16) 多義語の意味用法のうち具体的で典型的な用法. Kellerman(1979)の無標もほとんど同じ意味である.

교보문고 KYOBO Book Centre

これを整理すると、Kellermanの研究のように、L1のプロトタイプ性は転移可能性と関連があり、L2のプロトタイプ性は習得可能性と関連があることになる。Shiraiは、このように学習者の容認度はL1プロトタイプとL2のプロトタイプの相互作用によるもので、学習者はレベルの上達につれて、母語話者の判断に近づいていくと主張する。

また、加藤[17)]は日本語学習者(中国人)を対象に日本語基本動詞「見る」と「開ける」においてL1(中国語)の影響を調べている。加藤は、実際のL2の産出に焦点をおいて、学習者が感じるL1のプロトタイプ度がどのように日本語の発話に関わるかを調査した。その結果、実際の発話でもKellermanの仮説通り、L1でのプロトタイプ度が高い項目に転移が起こりやすいとしている。

こうした研究から学習者はすでに形成されているL1の影響を受けやすいが、その転移は機械的に起きるわけではなく、その用法のプロトタイプ度、レベルなどに影響されることがわかった。しかし、学習者がL1の影響により過剰拡張すると言っても、それが本当にL1によるものかは不確かなところもある。学習者が母語話者は使わない用法を使ったり、受け入れたりすることはよくあることで、学習者の判断が本当にL1の影響によるのか判断するためには、異なる母語背景を持っている学習者と比較をしないといけない。本研究では、「～出す」の意味把握において韓国語母語話者がL1の影響を受けるかをみるが、その際、対照群として中国語母語話者にも調査を行うことにする。それに先立ち、今まで曖昧だった「～出す」と「～내다」の差やその要因を明らかにした上で、両語の差が学習者に与える影響を調べる。

本研究の研究課題は次のようである。

1) 日本語の複合動詞「～出す」と韓国語の対応語「～내다」の差やその要因は何か。
2) 「～내다」の意味は、韓国語人学習者の日本語の「～出す」の意味把握に影響するか。

①その判断はレベルによって変化するか。

17) 加藤稔人(2005)「中国語母語話者による日本語の語彙能力―プロトタイプ理論，言語転移の観点から―」『第二言語としての日本語教育』8号，pp.5-23.

교보문고 KYOBO Book Centre

②中国語母語話者との差は見られるか。

Ⅲ.「～出す」と「～내다」の意味

3.1「～出す」の意味

『大辞林(第２版)』には、本動詞「出す」の意味が27項目に分けて述べられている。山梨[18]は、このような「出す」の様々な意味を、容器のイメージ・スキーマ(image schema)が背景化していく過程として説明する。イメージ・スキーマとは、「日々の具体的な経験の中で繰り返し現れるパターン、形」[19]を指す。言い換えれば日常の経験から得られた具体的なイメージが抽象化して１つの概念を形成し、様々な領域にも使われるようになることである[20]。「出す」の場合は、具体的な内部空間(容器)から外部空間への移動を示す動詞が、物理的空間が背景化されながら、容器のイメージ・スキーマを介した意味拡張が起きる。

(2) ① かばんから書類を出す。
② 家具を庭に出す。
③ 新しく本を出す。
④ 火事を出す。

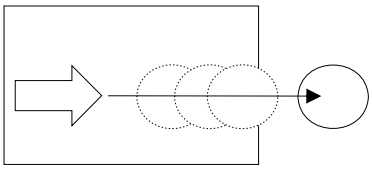
①は、内部空間(容器)がはっきりしていて、その空間が「から」格で表示されている。②ように「容器」が省略される例も考えられるが、物理的な移動の意味だと「部屋から」など具体的な空間が想定できる。しかし、③、④などの例では、内部空間が抽象化し、何かの出現に焦点が当てられていると考える。このように山梨は「出す」の意味が多様であっても、それを１つのイメージ・スキーマの展開として理解している。即ち、本動詞「出す」は、対象の内部空間から外部空間への具

18) 山梨正明(1995)『認知文法論』, ひつじ書房, pp.101-110.
19) 松本 曜(2003)『認知意味論』, 大修館書店, p.101.
20) 例えば, 英語の前置詞*in*は, in the roomのような具体的な空間を表す表現が, in the group(社会的な空間), in the mood(心理的な空間)へと拡張していく. in the roomがプロトタイプで,「容器の中」というイメージスキーマ転換を介し, 意味の拡張が起きている.

교보문고 KYOBO Book Centre

体的な「移動」を表すプロトタイプから、イメージ・スキーマ変換を介して、存在しなかった事態の「創出」の意味へ拡張している。この意味展開は、複合動詞「～出す」にも反映されると思われるので、本研究でも、こうした知見を受け、１つのイメージ・スキーマの展開として「出す」が多義を成していく過程を見ていく。

まず、複合動詞「～出す」の基本義も、本動詞同様、内部から外部への「移動」であると思われる。図で表すと＜図１＞のようになる。



＜図１:「～出す」のイメージ・スキーマ＞

（Ⅰ）＜対象を＞＜V1して＞＜内部空間/自分の領域から＞＜外部空間へ＞＜移動させる＞

a. ハンドバックから手帳を取り出した。

b. ケースから本を抜き出した。

c.母親は激怒して彼を家から追い出した。

（Ⅰ-1)＜主体が＞＜V1して＞＜外部へ＞＜移動する＞

a. 教室を抜け出す。

b. 包帯から血が滲み出す。

複合動詞の場合、本動詞での意味や統語的な特徴が弱まることがよくあるので、（Ⅰ-1)のような自動詞的用法もあるが[21]、これらの意味は、共通して具体的なものや物理的な動因、空間移動が想定できる。

こうした「外への移動」という具体的で物理的な動作はイメージ・スキーマ変換によって抽象的、心理的な動きに適用したのが「顕在化」である。姫野はこの意味を「顕現」「発見」「創出」の３つに再分類しているが、「顕現」と「発見」の場合、も

21）語彙的複合動詞において,「他動性の調和」の例外としての再帰動詞用法に関しては李良林(2002)を,「抜け出す」「抜け出る」など自動詞と他動詞の意味差に関しては山梨(1995), 寺村(1984)などを参照

교보문고 KYOBO Book Centre

ともとあったものが表に露出され、存在を明らかにするという意味では似ている上、格助詞「に」や「で」でその顕現や発見の現場を示すなど、意味的および統語的な共通点が多いので、本論文では、山崎[22]のように(Ⅱ)「顕現・発見」と(Ⅱ－1)「創出」の２つに分ける。

(Ⅱ) <隠れていた対象を><V1して><公的空間に/見えるところに><現す>
a. ヘッドライトが人影を照らし出す。
b. 青春時代のことが思い出される。
(Ⅱ-1) <新しいもの/事態を><V1して><創出する>
a. 素晴らしい作品を作り出してきた。
b. 新しい企画を考え出す。

「顕現・発見」の意味は、もともと見えなかったもの、隠れていたものが、V1という動作を通して露出されるようになることを意味する。そもそも、対象は内部にあるときは見えないが、外部へ移ることによって目に見えるようになる。「外部への移動は見えなかったものの出現」という経験が1つのイメージを形成し、移動がなくても何かの露出が「～出す」で表せるようになったと言えよう。このように中に隠れていた物事の露出を表す「顕現・発見」が、存在しなかった新しいものや事態の出現、即ち「創出」の意味へと転じると思われる。このような何か新しいものの「創出」の意味がさらに抽象化したのが(Ⅲ)開始のアスペクトである。

(Ⅲ)(急に、予測できなかった)<V1することが><始まる>
a. 急に雨が降り出す。
b. その話を聞くと、彼女は突然泣き出した。

(Ⅰ)や(Ⅱ)の場合、結合されるV1が大体決まっており、１つの語彙としての性格の強い「語彙的複合動詞」であるのに対し、(Ⅲ)開始の「～出す」は制約を受けにくく、多くの動詞に自由に接続できる。しかし、だからと言って、(Ⅰ)または

22) 山崎恵(1993)「複合動詞後項要素の本動詞用法との意味的な関わり―「だす」と「～だす」を例として―」『富山大学紀要』3, pp.89-105.

교보문고 KYOBO Book Centre

(Ⅱ)の「～出す」と「開始」の「～出す」の間に明確な線が引けるわけではない。

c. ミルク色の樹液がにじみ出し、(後略)
d. 新製品を売り出す。

姫野は(Ⅲc)に関して、「にじんで出て」か「にじみ始めて」かが曖昧であり、両方の意味を兼ね備えていると述べている。森田[23]は(Ⅲd)に関して「まだ一般に見せていない、奥に隠されていた新しい品を一般へと公開し販売するという『内→外』『発生』の意味と、販売を始めるという『開始』の意とを含む」と述べる。これら例は、何かが外部に移動、または現れることと、その開始の意味を持ち合わせており、その境界線に位置する意味であると思われる。このように「～出す」の意味は「移動」が次第に抽象化され、「開始」のアスペクトにまで転ずるが、(Ⅰ)から(Ⅲ)までの意味は繋がっており、次第に転じていくと言えるだろう。

3.2. 「～내다」の意味

「～내다」も「～出す」と同様に、具体的な移動の意味から顕在化を経てアスペクトへと転じていく。その意味を「～出す」と同様に大きく3つにまとめると次のようである。

(Ⅰ)<対象を><V1して><内部空間/自分の領域から><外部空間へ><移動させる>
a.국에서 멸치를 건져냈다.(汁から煮干を掬い出した)
b. 어머니는 화가 나서 철수를 쫓아냈다.(母親は激怒してチョルスを追い出した)

「～出す」と同様に、V1して外部空間のほうへ移すという意味である。ただし、韓国語には自動詞との結合例はなく、すべてのV1が、対象に物理的な力を行使する他動詞である。

23) 森田良行(1977)『基礎日本語-意味と使い方』, 角川書店, p.273.

교보문고 KYOBO Book Centre

(Ⅱ)<隠れていた対象を><V1して><公的空間に/見えるところに><現す>
a. 옛 일을 기억해내다. (昔のことを思い出す)
b.숨겨진 사실을 밝혀내다.(隠れていた事実を暴け出す、明らかにする)
(Ⅱ-1)<新しいもの/事態を><V1して><創出する>
a.작품속에 젊음의 열정과 개성을 그려내다.(若さの熱情と個性を作品の中で描き出す)
b.팀원이 합심해서 좋은 결과를 만들어내다.(チームが心を合わせ、いい結果を作り出す)

露出の意味を持つV1と結合して、「～내다」も「～出す」同様、隠れていた対象の「顕現・発見」を表すようになる。このように内部空間から何かを移動させることから、創出の意味にまで拡張されるのは「～出す」とあまり変わらないように見えるが、「～내다」の３番目の段階のアスペクトは「開始」の「～出す」とは反対とも言える「完遂」である。しかし、この「完遂」の意味も「創出」の拡張の意味であると言える。「創出」とは、１つの事態(考える、作る)が終わり、その結果、新しい事態が出現する動作を意味する。(Ⅱ-1a)を見ると、「描く」ことにより作品が「完成し」「誕生した」と理解できる。ここで「完成」に焦点を合わせると、主体の強い意志の伴う(Ⅲ)「完遂」の意味へと転じる。

(Ⅲ)<対象を><V1して><完遂する>
a.'해냈다'는 생각에 눈물이 났다.(「やり切った」と思うと涙がこぼれた)
b.마당의 잡초를 전부 뽑아냈다. (庭の雑草を全部抜き終えた)
c.오랜 연구끝에 겨우 알아냈다. (長い研究の末、かろうじて究明した・究明し出した)

(Ⅲa)は、「する」または「やる」に当たる動詞「하다」+「내다」であるが、日本語の「やり出す、し出す」が「開始」を意味するに対し、韓国語は「完遂」の意味となる。外部空間への「移動」が、何かの作業の結果、新しい事態が成立する「創出」となり、そこから、元の領域から出る、動作が終わることを表す「完遂」になることである。「完遂」の「～내다」は「開始」の「～出す」同様、様々な動詞をV1として取

교보문고 KYOBO Book Centre

り、その動作を主体の意志で完遂するアスペクトを表す。しかし、この「～내다」も意味的に「移動」や「顕在化」の意味を併せ持つ場合が多い。(Ⅲb)の場合は「庭の雑草を抜く」行動と、それを完遂することを表しており、(Ⅲc)は「顕在化」と「完遂」の中間に位置する用法といえる。

3.3.「～出す」と「～내다」の差とその要因

「～出す」と「～내다」は、具体的な「移動」の意味が抽象化して「顕在化」を表し、さらに時間のアスペクトへと文法化(grammaticalizaion)する。アスペクト的用法は、他の意味に比べ生産性が高く、接辞のような性格が強くなっていることも共通している。このように空間の概念を借りて、時間を表すようになるのは、諸言語において普遍的に見られる現象であると言われる。しかし、空間から時間への拡張は共通していながら、その発展の方向は異なっていた。

「～出す」が「創出」の意味で使われるときは、ある過程の結果、新しいものが出現したという意味になるので、「完成」と「発生」の２つの事態が重なる接点にあるといえる。「考え出す」「作り出す」などは、１つの事態(考える、作る)が終わり、その結果、新しいものや事態が出現したことを表す。田辺[24]は、創出の「～出す」は「動作の完了を表す『～上げる』と共通のものが多い」と述べている。こうしたことから、「創出」は、「完了」と「開始」の接点にある用法であるとも言えるだろう。この点に関しては、韓国語の「～내다」も同じで、単純化して言うなら、創出には、両語ともに「終わり」と「始まり」の意味合いを持っている。

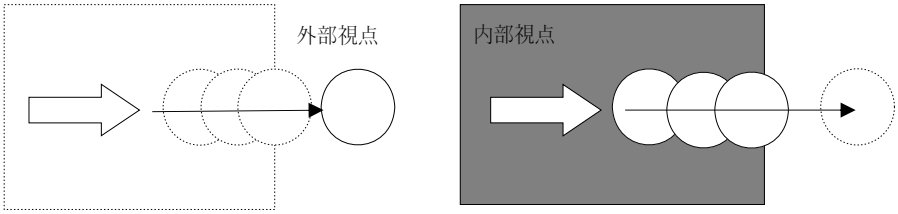
しかし、両語を比較してみると、「移動」と「顕在化」の意味であっても、「～出す」は新しい物事の「出現」、「～내다」は「終わり」の意味合いを持っているのが多い。例えば、「作り出す」は何かが作られ「出現する」ことに焦点があるが、対応語である「만들어내다」は、作る行為を完遂したという含みをより強く持っており、「作り上げる」に近いといえる。また、日本語の「洗い出す」は、何か隠れていた事実を露出、出現させる、顕にするという意味として使われるが、それを直訳した

24) 田辺和子(1983)「複合動詞の意味と構成：「～ダス」・「～アゲル」を中心に」『日本語と日本文学』3, p.42.

교보문고 KYOBO Book Centre

韓国語の「씻어내다」は汚れなどを無くす、水で洗って自分の領域から外のほうに完全に排出するという意味である。

このように外部空間への移動が「開始」または「完遂」へと転じていく両語の差は、基本的に同一の現象を異なる心的視点から眺めているから、言い換えれば、心的視点の相違から起こる問題であると思われる。同じ現象が視点の位置によって、反対の意味になることは日常の言語生活でもよく観察されることである。例えば、同じ坂を「どこから見ているか」によって「上り坂」とも「下り坂」とも言える。主体が統制できない急な「開始」と、主体の強い意味を伴う「完遂」という両語の差も、基本的に同様の現象を異なる心的視点から眺めているから起こることであると思われる。<図2>のように、外部から「外部空間への移動」を眺めるなら、その移動によってなかった事態が発生(開始)したと把握できる。一方、何かが外部空間に移動することを内部空間から眺めるなら、ある事態が自分の領域から除去される、「完遂」「終わり」になる。



<図2 :「開始」と「完遂」の視点>

「~出す」の場合、視点が外部空間に置かれ、内部空間と動因は背景化され、事態の出現が焦点化される。これに対して、「~내다」は、視点が内部空間に置かれ、主体の領域から出て行くことが焦点化される。今井は、「~出す」がこのように外部空間の視点を取るので、単なる事件の開始を表す「~始める」と違って「話者の視点から見て知覚可能な形での事態の生起」[25]という意味を持ち、話者は命題が表現する事態を知覚するだけであり、事態に対する制御力を持っていないという。それ故、姫野が述べたように、開始の「~出す」は意志的表現(命

25) 今井 忍(1993)「複合動詞後項の多義性に対する認知的意味論によるアプローチ―「~出す」の起動の意味を中心にして」『言語学研究』12, p.18.

교보문고 KYOBO Book Centre

令、使役など)の文脈には現れにくくなると思われる。

これに対し、完遂の「～내다」は、主体の強い目標達成認識が含まれていることが多いので、単なる「完了」とは区分され、「完遂」または「成就」の意味として定義されるようになる。このように、主体が望んでいたことを完遂する意味であるので、共起する副詞も、動作主の難しい課題への克服意志や決意を表す「必ず」「なんとか」「何があっても」、長い時間をかけたことの成就の意味を強める「やっと」「かろうじて」「無理やり」、難しい問題を何とか解決できたという「完全に」など、完遂度や成就度を高めるものが多いことが指摘されている[26)]。

では、次の章では、このような両語の差を踏まえ、韓国語を母語とする学習者の「～出す」の意味把握にL1の意味領域がどのような影響を及ぼすかを実際の調査をもとに考察する。

Ⅳ.「～出す」の意味把握における韓国語の影響

4.1 調査方法

4.1.1 調査内容

調査内容は複合動詞「～出す」の入った様々な文を読んだ自分の感じを4段階にチェックする文受容判断テスト(acceptability judgment test)であった。問題には移動、顕在化、開始などの正しい「～出す」文に、本研究の対象となる「完遂」の意味を持つ不自然な「～出す」文12項目を混ぜた。4段階は「1.自然である－2.まあまあ自然である－3.あまり自然ではない－4.不自然である」で、「正しいか」「正しくないか」よりは、自分が思う「～出す」の意味から、その文が自然に感じられ受容できるか、できないかを聞いた。ここで、1と2は自然で受容できる表現、3と4は不自然で受容できない表現となり、答えを「受容」、「非受容」に分けて考察をすることもできる。

本稿ではL1の影響を見るのが目的であるので、日本語の「～出す」としては使われないが、「～내다」として使われる「完遂」の意味のみを対象とする。「不自然」

26) 홍사만(2009)「보조동사 [내다]와 [버리다]의 양태적 기능대비」『어문학』101, pp.25－51.

교보문고 KYOBO Book Centre

が予想される12項目は、韓国の大学生を対象に前もって韓国語の複合動詞「～내다」の使える文を書く調査を行い、書いてもらった文の中から日本語「～出す」としては不自然な状況の文を基本として、文の長さや表現などを調節して提示した。これらの文に関しては、「～出す」以外は誤りがないように日本語専攻の３人の母語話者に確認してもらった。

また、テストの際、簡単なアンケートを実施し、学習年数や日本での滞在経験、日本語能力試験級数などを書いてもらった。調査が終わった後は、23名を対象に個別的にフォローアップインタビューを行った。インタビューの時間は１人当たり20分くらいで、なぜそう判断をしたか、理由を聞いて録音した。

4.1.2 対象者

① 韓国人日本語学習者(KO)：110人(韓国の大学の日本語関連学科３～４年在学)
日本語レベル中上級、学習年数２～５年

② 日本語母語話者(JA)：20人(東京の大学に在学)

③ 中国人日本語学習者(CH)：89名(中国の大学の日本語関連学科３～４年在学)
日本語レベルは中上級、学習年数は３～４年

KOは、ソウル所在の大学３校で日本語を専攻している３～４年生を対象とした。調査協力者の学習年数は２～５年で、レベルは中上級から上級に相当する。このように中級以上の学習者を想定したのは、ある程度の日本語能力がないと「～出す」の入った様々な文を十分理解できないと予想されたからである。

対象者のうち、日本語能力試験１級を持っている人は34名で、全体の31％、２級を持っている人は23名で全体の21％であった。また、１級準備中と答えた学習者が28名(25％)、２級準備中と答えた学習者が25名(22％)であった。このように調査協力者は４つのグループに分けられるが、そのうち、１級保持者と、２級準備グループの間に明確なレベルの差があると仮定し、両グループを比較したいと思う。２級保持者の場合、試験を受けてからある程度時間が経ているため、調査当時は１級の実力を持っていることも考えられるし、１級準備者は、実際どの程度１級に近づいているか計りにくい。「２級準備」グループだと、確実に１級に

교보문고 KYOBO Book Centre

及ばないグループとして考えられ、１級保持グループとレベルに差があると考えられる。従って、本研究では、１級保持者(34名)を上位群、２級準備者(25名)を下位群として設定し、レベル間の差を考察する。

ここで、L1の影響を論ずるには、他の言語を母語とする学習者との比較も必要であるので、CHに関する調査も行い、KOと比較する。中国語の動詞「出」も、V1を取り、「V1出」として使われ[27]、その意味の展開は韓国語と日本語に似ているところが多い。

『中日・日中統合辞典』(小学館)や、中国語の「V出」の意味や統語を分析した王[28]を参考にすると、中国語の「V出」には、次のような意味がある。

① 移動(具体的なものの外部への移動)
：从口袋里掏出一封信(ポケットから手紙を１通さぐり出した)
② 顕現・発見(隠れていたもの、見えなかったものの出現・露出)
：我猜出了他的來意(私は彼が来たわけを探り当てた)
③ 創出(新しいものの出現)：他写出了一篇小説(彼は小説を１冊書いた)

中国語の「V出」も、移動から創出においては「～出す」や「～내다」の意味と似ており、具体的で物理的な移動がイメージ・スキーマを介して抽象化されることは共通している。しかし、日本語の「開始」、韓国語の「完遂」のようなアスペクト的な意味への文法化は見当たらない。それで、「完遂」の意味を持っている様々な「～出す」の判断において、KOとCHの間にと受容度の差があるを比較する。

CHは、中国の大学２校で、KOと同様に日本語専攻の３～４年生を対象とする授業で調査を行った。有効な回答87部のうち、日本語能力試験１級保持者31名、２級保持者７名、１級準備者47人、２級準備と答えた人は２名おり、韓国の被験者に比べ、「２級保持者」や「２級準備」の割合が低い。しかし、両グループは同じく日本語専攻の３～４年生であり、調査紙に一緒に提示された正しい「～出す」文の受容度においてほとんど差が見られなかった[29]ので、少なくとも「～出

27) この際，中国語では「方向補語」という用語を使う.
28) 王　蓓淳(2009)「中国語複合動詞「V出」の意味構造」『大阪大学言語文化学18』，pp.209－220.
29) 参考として正しい「～出す」文の受容度の内訳を意味別にまとめると次のようである.

교보문고 KYOBO Book Centre

す」の意味に関する知識は両グループに差がないと仮定し、参考データとして用いる。

4.2 結果と考察

4.2.1 全体の結果

12項目の結果をJA、KO、CHのグループ別に示すと<表3>のようになる。平均は1(自然)～4(不自然)の答えの平均で、受容度は1や2を「受容」、3や4を「非受容」として「受容」の割合を示したものである。 *t* 値はKOとCHの平均の有意差である。

JAの結果は、ほとんどの項目において4に近い平均値、0%の受容度を示している。ただし、1番のみが70%の割合で受容され、唯一JAの間で揺れが見られた項目である。KOは、全体平均が2.28、全体の受容度が57%で、50%を超える受容度を示しているが、項目によって異なる様子を見せている。すべて韓国語に直訳できる文だとしても平均が1.5程度のものから3点を超えるものまであり、受容度も90%近いものから25%しか受容されていないものまであった。12項目のうち、8項目が受容度50%を超えており、4項目の受容度が50%以下であった。JAが受容しなかった2番以下の項目のうち2番は平均1.49、受容度84%でかなり高い数値で受容されている。8番までは、受容度も50%を超えているが、11番と12番は全体的に3(あまり自然でない)前後の平均を示し、JAの判断に近づいている。

	KO(n=110)	CH(n=87)
移動	1.53(84%)	1.70(79%)
顕在化	1.97(69%)	1.91(71%)
開始	1.93(68%)	1.98(70%)

교보문고 KYOBO Book Centre

＜表３：「完遂」の受容度の比較＞

(**p<.01、*p<.05)

		JA (N=20)		KO (N=110)		CH (N=87)		*t* 置
番号	文	平均	受容度	平均	受容度	平均	受容度	
1	みんなが２年かけてやっと100分間の映像を作り出した。	1.8	70%	1.49	88%	1.39	91%	-8.22
2	これで庭の雑草は全部抜き出したね。	3.8	0%	1.55	84%	2.05	64%	3.69**
3	この小説を全部書き出すのにたった1週間しかかからなかったそうです。	3.55	5%	1.86	75%	2.21	61%	2.23**
4	お母さんは1週間かけて、すばらしいセーターを編み出した。	3.85	0%	2.07	71%	2.01	66%	-0.361
5	少数点以下は切り出してください。	3.85	0%	2.19	65%	2.31	54%	0.971
6	血の痕跡は完全に水で洗い出し、何も残ってない。	3.75	0%	2.22	63%	3.13	23%	6.68**
7	習ってから1ヶ月後、やっと仮名を読み出すことができるようになった。	3.95	0%	2.37	56%	2.4	53%	0.261
8	大変な仕事だったが、一人で済み出した。	3.95	0%	2.47	55%	2.97	31%	3.55**
9	こうなったからには、最後までやり出すしかないです。	3.9	0%	2.5	48%	2.64	44%	0.987
10	どんなにつらいことがあっても耐え出す覚悟はしています。	3.95	0%	2.64	42%	3.25	18%	4.21**
11	3年間の取材の末、知り出した事実は、衝撃的なものであった。	3.85	0%	2.94	31%	3.21	22%	1.87
12	彼は死ぬまでその秘密を守り出した。	3.95	0%	3.04	25%	3.54	7%	4.04**
	平均	3.67	6%	2.28	57%	2.64	44%	4.48**

KOをCHと比較すると、全体12項目の受容度が、KOは57％であるのに対し、CHは49％でKOの方が高く、全体の平均もCHは平均2.64で、KOの2.28より高い(不自然と感じる)。両グループの全体平均を*t*検定で比較した結果、1％水準で有意差を示している($t(195)=4.475$, $p<.01$)。

項目別に見ると、12項目のうち10項目においてKOの受容度が高く、そのうち

교보문고 KYOBO Book Centre

６項目において有意な差が見られた。従って、これらの項目に関してKOがより自然と感じていると言えそうである。

今度は、KOの１級保持者とCHの１級保持者も比較して、上位群の学習者の間で差が出るかを見る。<表4>で*t*値①はKOの上位群と下位群の平均の有意差を示しており、*t*値②はKO１級保持者とCH１級保持者の比較である。

<表4：「完遂」における上位群と下位群>

(**p<.01、*p<.05)

	KO1級(N=34)		KO2級準備(N=25)		*t* 置①	CH1 級(N=31)		*t* 置②
	平均	受容度	平均	受容度		平均	受容度	
1	1.62	85%	1.58	80%	0.139	1.48	84%	-0.555
2	1.82	79%	1.33	88%	2.285**	2.1	65%	1.150
3	2.48	53%	1.39	84%	4.247**	2.48	58%	-0.003
4	2.41	56%	2	72%	1.520	2.35	48%	-0.210
5	2.35	56%	1.96	68%	1.525	2.45	52%	0.440
6	2.44	53%	2.08	56%	1.294	3.16	26%	2.821**
7	2.79	41%	2.2	56%	2.071*	2.77	32%	-0.074
8	2.56	56%	2.52	56%	0.132	3.45	13%	3.623**
9	3	32%	2	64%	3.475**	3.32	19%	1.209
10	3.38	15%	2.04	68%	5.075**	3.71	6%	1.865
11	3.29	9%	2.56	52%	2.433*	3.65	3%	1.907
12	3.59	12%	2.38	40%	4.588**	3.81	0%	1.490
平均	2.65	44%	2.01	65%	2.914**	2.90	34%	2.229*

まず、KOをレベル別に見ると、上位群と下位群の間に、全体平均が１％水準で有意差を示している($t(57)=2.914$, $p<.01$)。上位群は全体平均が2.65で不自然のほうになっており、受容度の平均も44％で、50％を満たしていない。これに対して、下位群は全体平均が2.01になっており、受容度の平均も65％を示している。受容度はJAにも受容された１番を除くと、ほとんどの項目において上位群が下位群より低く、レベルが上がると日本語として不自然な表現に関しては受容されなくなることが示唆される。KOの上位群は、１番と２番のみが１点台の平均で、受容度も各々85％と79％で比較的高いが、その他の項目は、平均が２

교보문고 KYOBO Book Centre

点を超えており、受容度も50％代か、その以下である。特に９番以下４項目を平均３以上で「不自然」と感じている。

このようにKOもレベルが上がるにつれ、「不自然」と感じる傾向があり、受容度が落ちていく。レベルが上がるによりL1の影響が弱まると言えそうである。従って、KOの上位群をCHの１級保持者と比較してみると、両グループの全体平均に比べ、その差が縮んでいることがわかる。しかし、全体平均において5％水準で有意差($t(57)=2.229$, $p<.05$)を示しており、12項目のうち、９項目においてKOの受容度が高い。また、最も受容度の低い10番から12番までを見ると、CHの１級は10％以下の受容度を示し、12番に至っては誰も受容していないが、KO１級保持者は受容度が下がったとはいえ、11番のみが9％で、12番も12％が受容している。上位の学習者はL1の影響から逃がれるが、他言語の学習者と比較してみると、その影響が窺えると言えよう。

4.2.2 項目別の考察

１番の「みんなが２年かけてやっと100分間の映像を作り出した」の場合、JAも平均1.8、70％の受容度を示しており、唯一JAの反応に揺れが観察された項目である。3章で述べたとおり、創出の意味の「～出す」は、動作の完了を表す『～上げる』と重なるところがある。実際、今度の調査でも多くのJAがこのように「～上げる」の方がより相応しい文を受容(JAの受容度70％)していた。しかし、「作り出す」はやはり新しいものの「創出」に焦点が当てられるので、このように「完遂」のイメージが強く感じられる文に「～出す」を使うことには違和感を覚えたJAが30％存在したと考える。

これは、中国語においても同じで、一定の努力の末、何かを生産する「作出」「編出」などの表現が存在することは前述した通りである。こうした用法に関しては「～出す」の「創出」のように、一部完了の意味を見出すことができる。このように何かの生産に関わる項目に関しては、CHも比較的高い受容度を示していたと考える。また、学習者のL1にないといって過剰拡張が起きないとは限らない[30]。学習者がL1、L2両方にない用法へと拡張する傾向はある程度認められ

교보문고 KYOBO Book Centre

る。しかし、中国語の「出」と日本語の「～出す」の「創出」の意味から「完遂」の意味を見出すことができるとしても、「～내다」のような「完遂」のアスペクトへの拡張はないので、KOのように強い「完遂」概念は持っておらず、韓国語を直訳したこれらの文に関する受容度はCHがKOより全体的に低くかったと考える。

2番から12番は、JAは受容していないが、KOはCHと比較しても「自然」と感じる傾向があった。しかし、KOも、このようにL1に直訳可能なすべての文を受容しているわけではなかった。JAに比べ、KOは項目によるばらつきがあり、特に2番の「これで庭の雑草を全部抜き出したね」の場合、非常に受容度が高い(84%受容)。この文は「雑草を抜く」動作と「庭の雑草を抜く動作が終わった」の2つの意味が重なっており、韓国語においては、この「移動」と「完遂」の結合が自然である(「뽑아내다」)。前述した通り、「～내다」の場合、自分の領域から何か「出す」、または「なくす」行動と、その行動を完全に終えたことを同時に示すことが多く、その際、「～내다」が「移動」か「完遂」かは曖昧である。インタビューでほとんどのKOは母語訳「뽑아내다(抜いて出す)」を受容の理由としてあげた。即ち、L1でプロトタイプの「具体的な移動」として受け入れ、自然に転移が起ったといえよう。また、日本語の意味から考えても、移動の「～出す」として解釈でき、何の違和感も感じなかったと思われる。しかし、上位になると「『抜き上げる』にすべき」と答える被験者が出ており、少し受容度が落ちている。

3番の「この小説を全部書き出すのにたった1週間しかかからなかったそうです」(75%受容)、4番の「お母さんは1週間かけて、すばらしいセーターを編み出した」(71%受容)は、時間をかけてやっと何かを「完遂」した行為である。しかし、ここでは何か完成した結果物が想定できるので「創出」の「～出す」として受け入れることができたと思う。また、5番の「少数点以下は切り出してください」(65%受容)、6番の「血の痕跡は完全に水で洗い出し、何も残ってない」(63%受容)は自分の領域から外へ向かって何かを移す行動、またはその「完遂」である。こうした場合、学習者は「～出す」の意味としてこれを受容することにあまり違和感を感じなかったと思われる。

30) 加藤稔人, 前掲書

교보문고 KYOBO Book Centre

KOの受容度が最も低かった(JAに近い判断を下した)のは11番の「３年間の取材の末、知り出した事実は、衝撃的なものであった」(31％)と12番「彼は死ぬまでその秘密を守り出した」(25％)であった。11番の「知り出した」の場合、日本語は不自然であるが、韓国語はこのように長い時間をかけて究明し抜いたことを、「알다(知る)」と「내다(出す)」の結合で表すことができる。12番は、日本語では「死ぬまでその秘密を守り通した」というべき文であるが、韓国語では強い意志を伴った完遂の意味として「(지켜)내다」が用いられ、正文となる。このような文を「自然」と答えた被験者は、母語の「完遂」の意味を「～出す」で表現することを自然と感じていた。インタビューの際、「韓国語の訳で自然だから」といった被験者がいた。しかし、母語訳が成立するといっても、より多くの学習者は「不自然」を選んでいた。特に上位群の被験者はインタビューで「韓国語を無理やり直訳した感じだ」と答え、受容しない人が多かった。即ち、母語で可能な表現がすべて日本語に直訳できるわけではないという意識を持っていると解釈できる。また、「～出す」の意味と合わないと答えた被験者は、「知る」や「守る」は動きがない行為なので、基本的に外への運動性か何かの創出を意味する「～出す」との共起に違和感を覚えたことであろう。

このように母語訳が可能だとしても、学習者は項目により異なる反応を示していた。具体的な物の「移動」または「創出」と関連する「完遂」に関しては、転移させる傾向があった。しかし、純粋に「完遂」の意味としてしか解釈できない「～出す」に関しては転移があまり起こらなかった。これは、Kellermanの予測通り、「完遂」を言語特殊として受け入れたからであると思われる。しかし、下位群の場合、全体的に受容度が低かった10番「耐え出す」、11番の「知り出す」、12番の「守り出す」に関しても40～68％が受容し、上位群とは１％水準で有意差を示している。レベルの低い学習者がより母語知識に頼る傾向があることを示唆する。

Ⅴ．おわりに

本研究では、「～出す」の意味を韓国語と対照し、両語の意味の差およびその

교보문고 KYOBO Book Centre

差の要因を明らかにした上で、韓国語を母語とする学習者が母語の概念にどのような影響を受けるかを実際の調査をもとに述べた。特に中国語を母語とする学習者にも調査を行い、母語別の差も入れて考察を行った。

「～出す」と「～내다」は外への移動を表す意味がV2としてアスペクトを表すようになるが、「～出す」は「開始」、「～내다」は「完遂」の意味であった。本稿では認知意味論のイメージ・スキーマを用いて、意味展開を統一的に説明しながら、両語の差が同じ事態を眺める視点の差によるものであることを明らかにした。

続いて、このようにL2と異なるL1の意味がL2意味把握に及ぼす影響を調べた。調査後、学習者は「～出す」の意味をどのように把握しているか、韓国人の被験者に「『～出す』にはどのような意味があると思うか」を思いつくまま自由に書くように促した。最も多かった3つの答えをレベル別に整理すると次のようになる(重複あり)。

＜表５：韓国人学習者が思う「～出す」の意味＞

※( )の中は人数

	1級 (N=34)	1級準備 (N=28)	2級 (N=23)	2級準備 (N=25)	全体 (N=110)
開始・し始める	71%(24)	46%(13)	60%(14)	20%(5)	42%(46)
完遂・やり遂げる	29%(10)	46%(13)	47%(11)	20%(5)	35%(39)
外への移動	38%(13)	36%(10)	39%(9)	24%(6)	35%(38)

韓国人学習者の答えのうち、最も多かったのは「開始」で、「完遂」と「外への移動」がその次であった。すべてのレベルにおいて「完遂」の意味を「～出す」の意味として挙げる学習者がおり、そのうち24名は「開始」と「完遂」を同時に書いていた。インタビューの際、「～出す」は「開始」と「完遂」の両方の意味を持っているか聞くと、文脈によって意味が変わると答えていた。しかし、１級を取っている上位群の学習者で「完遂」の意味を書いた人は29%に過ぎず、L1にはない「開始」は71%の人が書いている。反面、１級準備と２級保持者は「開始」と「完遂」の数値があまり変わらない。これに比べ、下位群は意見がばらばらで、まだ「～出す」の意味を体系的にカテゴリー化し、メター言語で説明するところまで至っていない

교보문고 KYOBO Book Centre

ことが窺える。「動作を強調する」「前の方向へ進行」など意見が細かく分かれ、まとまった答えになっていなかった。

このように学習者は、レベルが上がるにつれ、言葉の意味に関する知識が体系化し、カテゴリー化すると同時に、L1の直訳から離れ、母語話者の感覚に近づいていくと思われる。しかし、上級になってもある程度母語の概念の影響が残りうることも確認できた。母語話者の場合、長い間、その言語に接した経験から自然に語彙の意味領域を内在化するようになるが、学習者は上達しても、母語話者のような自然な語彙カテゴリーの形成が難しく、学習者の意味領域にはL1とL2の意味が混在していた。こうした現状に対し、辞書式の直訳よりは語彙の意味構造と意味間の関わりをわかりやすく提示すること、また、L1とL2の意味が重なる部分や、拡張によって異なる部分を明らかにし、そのずれの原因を説明することも１つの代案になりうると思われる。今後更なる動詞の意味分析、対照を通して、両言語の差を明らかにしながら、効果的な語彙教材・教授法へ繋げていくことが課題として残る。

참고문헌

김기혁(1983)「보조동사의 생산성」『연세어문학』, pp.136-160.

손세모돌(1994)「보조용어의 의미에 관한 연구」『한글』 한글학회, pp.107-129.

홍사만(2009)「보조동사 [내다]와 [버리다]의 양태적 기능대비」『어문학』101, pp.25－51.

李暻洙(1996)「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究ー本動詞との関連を中心にー」『日本語教育』89, pp.76-87.

今井 忍(1993)「複合動詞後項の多義性に対する認知的意味論によるアプローチ―「～出す」の起動の意味を中心にして」『言語学研究』12, pp.1-24.

王 蓓淳(2009)「中国語複合動詞「V出」の意味構造」『大阪大学言語文化学』18, pp.209－220.

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版.

加藤稔人(2005)「中国語母語話者による日本語の語彙能力―プロトタイプ理論、言語転移の観点から―」『第二言語としての日本語教育』8号, pp.5-23.

田辺和子(1983)「複合動詞の意味と構成 ：「～ダス」・「～アゲル」を中心に」『日本語と日本文学』3, pp.40-49.

陳 曦(2007)「学習者と母語話者における日本語複合動詞の使用状況の比較―コーパスに

교보문고 KYOBO Book Centre

よるアプローチ―」『日本語科学』22, pp.79-99.
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
野村雅昭・石井正彦 (1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所.
姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
松本 曜(2003)『認知意味論』大修館書店.
松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房.
森田良行(1977)『基礎日本語-意味と使い方』角川書店.
_____(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院.
山崎 恵(1993)「複合動詞後項要素の本動詞用法との意味的な関わり―「だす」と「～だす」を例として―」『富山大学紀要』3, pp.89-105.
Kellerman, E.(1979) Transfer and non transfer: where we are now. *Studies in second language acquisition2*, pp.37-59.
Odlin, T.(2006) Could a contrastive analysis ever be complete? In Avabski,I.(ed.)*Cross Linguistic Influence in the Second Language,* pp.22-35.
Odlin, T.(2008) Conceptual transfer and meaning extensions. In Robinson,P. and Ellis,N.C.(eds.) *Hand book of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition,.* Routledge, pp.306-340.
Shirai Y.(1995) the acquisition of the basic verb Put by Japanese EFL learners: prototype and transfer 語学教育研究12 大東文化大学, pp.61-92.
Tanaka, S. and Abe, H.(1985) Conditions on interlingual semantic transfer. *Tesol 84:A brave new world for TESOL,* pp.101-120.

❖ 투고일 : 2012.12.31
❖ 심사완료일 : 2013.1.17
❖ 게제확정일 : 2013.2.5

교보문고 KYOBO Book Centre